

## 【実践報告】

# 熊本大学サマープログラム2008における 日本語教育について

今西 利之・松瀬 成子

## 要 旨

本稿では、2008年度に熊本大学で実施された、海外協定校の学生を対象とした2週間の特別プログラムである「熊本大学サマープログラム2008」における日本語教育について、実施にいたる背景、経緯、実施状況などを報告する。

### 1. はじめに

熊本大学では、本年度、海外協定校の学生を対象とした2週間の特別プログラムである「熊本大学サマープログラム2008」が実施された。これは、全学的な取り組みとして行われたもので、留学生センターは日本語教育の実施を担当した。本稿は、「熊本大学サマープログラム2008」において行った日本語教育について、実施にいたる背景や経緯、実施状況などの報告である。

### 2. プログラム全体の概要

まず、「熊本大学サマープログラム2008」の概要について簡単に説明する。

#### 「熊本大学サマープログラム2008」

目的：アジア諸国の協定校に在学する学部学生に短期の日本滞在を通して、日本の良さ、熊本の良さを経験させる。（これを通じて、将来的な本学への留学を促す。）

期間：2008年7月27日(日)～8月9日(土) 14日間

参加者：海外協定校の学部学生30名

- ・中国6校、韓国4校 計10校
- ・参加者の専門分野：日本語(7名)、観光学(5名)、機械設計(3名)、保健学(2名)、景観学(2名)、食品管理(1名)、数学(1名)、新素材工学(1名)、法学(1名)、国際経済法(1名)、金融学(1名)、

分析化学(1名)、知的財産権(1名)、視覚芸術設計(1名)、建築学(1名)、自動車(1名)

参加費用：10万円(不足分は学内経費により補填、渡航費、その他雑費は自己負担)

宿泊場所：市内の学生向け宿舎

### 3. 実施にいたる背景

熊本大学では、2007年度にも同種のプログラムが行われている。これは全学的な取り組みとして行われたものではなく、学内のある部局が企画・立案したものであり、留学生センターには日本語教育の実施についての協力依頼があった。この段階で、このプログラムは日本語又は英語による専門教育に内容の中心が置かれているとの説明があり、日本語教育の授業としては、日本体験の一環として3コマ(1コマ90分)×2クラスが与えられ、すべての授業を留学生センターの専任教員が担当した。日本語教育の実施にあたっての問題点や日本語の授業を通じて筆者自身が受けた印象は以下の通りである。

- ・直前まで、参加者の専門や日本語能力などの情報がなかった。従って、日本語教育の内容を検討することがほとんどできなかった。
- ・専門教育を期待している参加者と日本語教育や日本文化体験などを期待している参加者が混在していた。
- ・日本語の学習経験がない参加者がいる一方で、日本語を主専攻とし既に超級レベルに達している参加者がいるなど、参加者の日本語能力に大きなばらつきがあった。

その後、2007年度末に、上記のプログラムを発展させ、全学的な取り組みとして実施することとなり、WGが設置された。WGのメンバーには留学生センター教員1名が加わることとなり、主に日本語教育の視点から議論に参加した。

### 4. 日本語教育に関するWGでの議論

WGでの議論のうち、日本語教育に関係する主なものを以下で報告する。

### (1) プログラムの内容

高等教育機関でこの種のプログラムを実施する場合、その目的や実施体制、想定される参加者のバックグラウンドやニーズを勘案しつつ、「専門教育」「日本語教育」「日本・日本文化体験」のどこに重点をおくのか(どのようなバランスとするのか)が議論の対象となるであろう。WGでは、全学体制で実施する、従って、学内の全部局がこのプログラムに授業を提供することが基本方針として確認された。次に、参加を呼びかける海外協定校が多種多様であり、想定される参加者の専門が特定の分野に限定されていないことを勘案し、共通項である「日本・日本文化体験」に主眼をおきつつ、「日本語教育」と「専門教育」は「日本・日本文化体験」の一環であるとの位置づけとし、プログラムを実施することとなった。そして、「日本語教育」は留学生センターが、「専門教育」は留学生センターを除く学内各部局が担当し、全体の統括を実施委員会及び事務組織である国際課が行うこととなった。(なお、ここでいう「専門教育」は、いわゆる日本事情の要素を多分に含んでおり、プログラム上は「日本事情」という名称になっている。以下では「専門教育(日本事情)」と表記する。) 協定校に対しては、このプログラム内容を十分理解した上で参加者を募るよう呼びかけることとなった。

### (2) 参加者の日本語能力

参加者の日本語能力に一定の制限を設けるかどうかについても議論となった。この点に関しては、参加を呼びかける協定校が中国、韓国に限定されていること、「専門教育(日本事情)」を中国語、韓国語で提供することが難しい、英語で提供できる部局と出来ない部局があることに加え、中国、韓国の協定校からの参加者に英語による「専門教育(日本事情)」を提供することには疑問が残る(仮に英語による「専門教育(日本事情)」を提供する場合、参加者の英語能力に一定の制限を設ける必要がでてくる)こと、事務サイドからの渡日後の各種手続きや安全確保上の問題に関する指摘等を考慮し、「日本語能力試験3級以上、あるいは同等以上の日本語能力を持つ者」という制限を設けることとなった。また、原則として、このプログラムは全て日本語で提供することとなった。

### (3) 日本語教育の時間数、クラス数、内容など

(1)(2)の議論を踏まえ、日本語教育の時間数、クラス数、内容なども検

討された。「日本語教育」が今回のプログラムの中心ではないが、「日本・日本文化体験」の中で「日本語教育」は重要な位置を占めるという認識のもと、昨年度と比べ大幅に時間数が増えることとなった。「日本語教育」以外の「専門教育(日本事情)」、「日本文化体験活動や見学旅行」、「セレモニー・オリエンテーション・交流会など」のバランスを考慮しつつ議論を重ねた結果、時間配分は以下ようになった。

〈サマープログラムの内容・時間数〉

内容	時間数
日本語教育	15時間 (90分×10コマ) (1日2コマ×5日)
専門教育(日本事情)	10.5時間 (90分×7コマ)
日本文化体験活動・見学旅行	約29時間
グループ発表会(準備を含む)	約7.5時間
セレモニー・オリエンテーション・交流会・ホームビジットなど	約19時間

クラス数については、1クラスの人数を最大15名程度とすることが了承され、計画段階での参加者数が35名～40名であったことから、3クラスを設けることとなった。その結果、今回のプログラムでの日本語教育は、3クラス×10コマ=30コマ(1コマ90分)の体制となった。(クラス分けは、プログラム初日にプレースメントテストを実施して行った。詳細については第5節で報告する。) また、3クラスが同じ時間帯に平行して行われることに加えて、実施期間が期末試験期間と重なっていたため、留学生センターの専任教員のみでの対応は不可能であり、非常勤講師予算が確保されることとなった。

内容については、今回の「日本語教育」が「日本・日本文化体験」の一環として位置づけられていることと、授業時間数が1日2コマ×5日と短期間であることを踏まえ、「参加者がこれまで学習してきた日本語をさまざまな形で実際に使用する機会を提供する」という基本方針のもとに実施することとなった。(授業内容の詳細については、第5節で報告する。) また、これに関連して、このプログラムには学内の学生がチューターとして参加することとなっていたため、チューター活動の項目の中に「日本語の授業への参加」という項目を含めることとなった。

## 5. 日本語教育の実施状況

### (1) クラス分け

参加者30名を3クラスに振り分けるため、日本語プレースメントテストを実施した。過密なスケジュールでテストの時間は60分と限られていたため、本学で使用している初級、中級向けのプレースメントテストをもとに簡易版を作成した。問題は初級と中級の2分冊にし、配点をそれぞれ50点とした。なお、テストは文法・語彙・文字・読解の問題で、聴解等は含まれていない。

テストの結果は、30名のうち初級パートで得点が60%以下の者が11名いた。4節で述べたように、今年度はこのサマープログラムへの参加資格を日本語能力試験3級レベル相当（初級終了程度）として協定校に通知していた。だが、実際には、初級前半程度、あるいはひらがなが読めないという者もあり、3分の1ほどの学生は参加条件とした日本語レベルには達していなかったということになる。ただ昨年度多かった日本語学習歴ゼロという学生がいなかったことから、日本語レベルの制限を設けた意義はあったと言える。

一方、トータルで85%以上の高得点を収めた者も6名おり、彼らの大半は1・2級合格者でもあった。

このように、参加条件は掲げてあったものの、想像していたように参加者の日本語力はゼロに近いレベルから上級まで広範囲にわたり、タイトな日程の中プレースメントテスト実施の時間を確保した意味はあった。

クラス分けはプレースメントテストの結果に自己申請の日本語能力試験の合格級を勘案して行い、10名ずつ初級・中級・上級の3つにクラス分けをした。相対的に韓国の学生に学習歴の浅い者が多かったが、各クラスに極端な国籍の偏りが出ないように配慮した。

### (2) 日本語プログラム

自国にいるときにはではできないことを経験させたい、これまで学習してきた日本語が使えるチャンスをできるだけ多く与えたいと考え、日本語教師ではない一般の日本人とコミュニケーションを取らせることを目的としたプロジェクトを行うことにした。「日本人に聞いてみよう」と題し、日本人に尋ねてみたいということを選択し、学内にいる日本人の教職員や学生にアンケートまたはインタビューを実施する。さらに、報告としてまとめたものをクラスで発表するというものである。

だが、時期的な問題もあり、日本語教育を担当する教員がコースを通して一つのクラスに張り付くことができず、結局3クラス合計30コマを専任教員が4名で6コマ、非常勤講師が6名で残りの24コマを分け合うような運営形態となった。そのため、日本語プログラム全体をプロジェクトワークとすることは無理と判断し、最小限の規模に抑え、それ以外のコマについては、正規の授業では取り扱われる機会が少ないもの、すぐに役立ちそうなものという視点で授業内容を設定し、以下のようなスケジュールを組んだ。

また、初級から上級までレベルによって変化は持たせていても、3クラスとも同じ科目名の授業が受けられるようにした。

〈日本語クラススケジュール〉

月/日	曜	時限	紅組		青組		白組	
7/29	火	1	OJ 1	柳田	OJ 1	日隈	OJ 1	片山
		2						
7/30	水	1	AV	マスデン	OJ 2	津留	OJ 2	片山
		2	P	松瀬				
8/1	金	1	OJ 2	柳田	P	松瀬	OJ 3	津留
		2			W	赤木		
8/5	火	1	S	岩谷	AV	梅田	P	松瀬
		2	W	赤木	S	岩谷	AV	小脇
8/7	木	1	OJ 3	山本	OJ 3	日隈	S	岩谷
		2					W	赤木

\*クラス名は序列が表されないものということで、紅組・青組・白組とレトロな命名となった。それぞれ初級・中級・上級レベル。

\*科目名の記号は以下の表を参照のこと。

〈日本語クラスの内容〉

科目名	コマ数	内容
小プロジェクトワーク 「日本人に聞いてみよう」(OJ)	6	日本人へのアンケート/インタビュー調査とそのまとめ、発表
視聴解(AV)	1	映像を教材とした活動 短い映像を元に、ディスカッション等発展的活動を行う。
音声表現(P)	1	円滑なコミュニケーションのための韻律指導リズム・イントネーションの意識化
文章表現(W)	1	手紙/メールの書き方 お礼や近況を伝える手紙/メールの書き方を学ぶ。実際にもかもメールのはがきで暑中見舞いを書く。
日本語を楽しむ(S)	1	日本の歌、言葉遊びなど、日本語そのものを楽しむ活動を行う。

### (3) チューターの利用

今回のサマープログラムでは、日本人チューターを小プロジェクトのクラスに入れることにした。個別の活動が多く含まれることもあり、担当教師の元、クラスの運営を補助するという名目であったが、日本人学生の「異文化理解」経験の機会を増やすことも目的の一つであった。

すべての日本語クラスに配置する必要も予算もないため、小プロジェクトを実施する授業にのみそれぞれ3名の日本人チューターを配置する計画を立てた。だが、謝金とは無関係に参加したいというボランティア・チューターが幾人も現れ、プロジェクトワークの各段階で多くの日本人チューター・ボランティアがクラスに入った。

チューターにはプログラム開始前に簡単なオリエンテーションを行い、授業前に担当教員と打ち合わせを行った。チューターがクラスに入ったことは、参加者だけでなく日本語教員にも好評で、特に日本語力が低い学生がいるクラスでは、彼らの存在なしにはプロジェクトワークは成り立たなかったと担当教員が語るほどであった。

チューター自身の満足度も高く、日本語クラス終了後、チューターにアンケートを実施したが、留学生との交流が楽しかったという感想だけでなく、日本語クラスに入ることで多くの者が韓国人・中国人学生の学習意欲の高さに刺激を受けたとし、自身の日本語や日本語の表現、日本文化への理解等を省みる機会、あるいは語学教育について考えるよい機会となったとしている。

### (4) 評価

日本語クラスの評価はおおむね高かったと言えるだろう。クラス最終日に実施したアンケートからも、満足度を1～5で点数化してみると、全クラス、全科目の平均値として4.47という数字が出た。

ただ、担当した日本語教員の側から見た場合、短期コースにつきものの「やりにくさ」があったことは否めない。特に今回、プロジェクトワーク以外の科目4つはすべて1回完結で、それぞれ違う教員が入ったため、落ち着かないものとなった。担任制に近い形をとり、全体を通して2～3人の教員が1つのクラスに関わるような運営の仕方が望ましいのだが、現在の実施条件では難しい。

## 6. まとめ

以上、「熊本大学サマープログラム2008」における日本語教育について、その背景や経緯、実施状況などを述べた。熊本大学留学生センターが「日本・日本文化体験」を主な目的とした2週間程度のプログラムの中で日本語教育を行うのは今回が初めての経験であり、暗中模索の中での取り組みであった。第5節で述べたように、今回の参加者からは「日本語教育」についておおむね好評を得たようであるが、内容、実施体制とも不備が多数あったことは否めない。

先般公表された「留学生30万人計画」骨子では、「大学等のグローバル化の推進」の中で、「短期留学、サマースクールなどの交流促進」がうたわれている。この流れの中で、「熊本大学サマープログラム」は来年度以降も試行錯誤を重ねながら実施されていくことになるであろう。その際、高等教育機関が実施するにふさわしい「サマースクール」とはどのようなものであるかという議論がまず必要となるであろうし、その中で「日本語教育」の位置づけや内容も考えていかなければならない。

同時に、「サマースクール」に参加を希望する海外の学生達のニーズがどこにあるのかといった視点も必要である。第2節で示したように、「熊本大学サマープログラム2008」の参加者の専門分野は多種多様であるが、プログラム終了時に実施されたアンケート調査によると、参加者の大半がプログラムへの参加理由として「日本語・日本文化を知りたい、体験したいから」と答えている。このことから、「サマースクール」の実施に際して、「日本語教育」あるいは「日本・日本文化体験」といった内容が、十分条件ではないにしても必要条件となる可能性が極めて高いと考えられる。

そうであれば、留学生センターには、これまで行ってきた「日本語教育」、すなわち、自らの大学に何らかの形で籍があり、ある程度の期間以上大学生活を送る留学生に対する「日本語教育」とは質的に異なる「日本語教育」の実施が求められているわけである。

また、「留学生30万人計画」骨子では「サマースクール」は「交流促進」の側面から位置づけられている。今回の「熊本大学サマープログラム2008」で行ったチューターの日本語クラスへの参加も、今後重要な取り組みとなるであろう。